

かみさと 神里 ^{たつひろ} 達博さん (43) 東大特任准教授



専門は科学史、科学論。主な著書は「食品リスク・BSEとモタニティ」「科学技術社会論の技法」(分担執筆)など。

「そろは言っても」は使わぬ

日本は、4枚のプレートがせめぎ合う、いわば地球物理学的な特異点に位置する。まさにその巨大な力が存在するからこそ、ユーラシアの東の海に弧状列島が生じたのだ。温帯モンスーンと並び、その地殻の不安定さは我が国の最も基本的な条件である。我々の先祖は度重なる地震・津波・噴火と、おびただしい悲劇を目の当たりにしたが、いつもそれらを乗り越えてきた。我々の心の古層に根ざす透明な無常観と、未来への優しい楽観の源は、この物理的な条件と無縁ではない。

昭和という時代の空気の中で、我々は「一時的に」その事実を忘却していた。だが、最初に阪神大震災が、そして全国で引き続いた多くの天災がその記憶を覚醒させていき、我々は3月11日の悲劇を迎えたのである。
今、考えなくてはならないことは無数にある。被災地の立て直し、原発事故の収束、エネルギー政策の再検討、東京一極集中のリスク、財政再建、高齢化への対処――、どれも一つにつながっている。そんな絡み合った糸をほぐすのは容易ではないが、まずは自戒を込めてささやかなルールを。それは、「そろは言っても」という言葉を使わないこと。この枕詞に引き続く言明は、癒する感情ではあっても、まっすぐの現実ではない。事実を直視し、未来を想う。そこから始めたい。

朝日新聞社の許可を得て掲載しております。
無断で転載・複写することを禁じます。